

小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観 及び運動有能感との関連

賀川昌明*, 横田直樹**

(キーワード: 小学校・自尊感情・体育授業・価値観・運動有能感)

I. 緒言

自尊感情は self-esteem の訳語である。そして、ジェームス (James, 1890) 以来、「自己評価の感情」として捉えられ、それを高めることが人間の行動目標であると主張されてきた。1960年前後にはアメリカを中心に self-esteem に関する研究が盛んに行われ、その中で注目される人物としてローゼンバーグ (Rosenberg, 1965) を挙げることができる。彼は、self-esteem を「特定の対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度」と定義し、そこには、「とてもよい (Very Good) = 自己優越感的側面」と「これでよい (Good Enough) = 自己受容 (満足) 的側面」と感じる2つの内包的意味があるとした。そして、彼自身は「これでよい (Good Enough)」と感じる (自尊感情) の測定を試みている。

小西・松尾 (1997) は、自尊感情の高い者ほど情緒安定性と社会的適応性があり、活動的・社交的で、リーダーシップのあるパーソナリティを示すとした。Waschull & Kernis (1996) は、自尊感情の不安定な子どもほど、好奇心・興味得点が低く、挑戦への活動意欲が低いなど、内発的動機づけが低いことを見出している。Campbell & Tesser & Faurey (1986) は、低自尊感情者は高自尊感情者と比べて自己概念の明確さを欠き、他者の反応に敏感であるとした。そして、他者に肯定的な思いを与えたという積極的な視点よりも、むしろ他者を「不愉快にさせたのでは」と心配する否定的な視点が支配的になるのではないかと推測している。また、そういった否定的な感情が安定性を低めている可能性がある指摘している。さらに梶田 (1985) は、自我防衛的で自己中心的な自尊感情は「生きる力を支える自信」に繋がらないと主張している。

これらのことから、健全な自尊感情を育むことは、ストレスや否定的情動に対する緩衝剤となったり、適応感を高めることで自分自身に対して肯定的感情を抱くことができ、そのことが自分自身に「自信」を抱かせること

ができると考えられる。そしてこのような健全な自尊感情を育むことが「生きる力」の源に繋がるように思われる。

一方、学校教育現場では、受験競争の過熱化、いじめや不登校、学級崩壊の増加、学校外での社会体験・自然体験の不足といった問題に対処することが急務とされている。例えば「むかつく」「きれる」等の言葉に代表される現代の子ども達の心の存り様を理解することも、そのひとつであろう。そして、これらの現象は自分自身に対する自信のなさがある場面で爆発し、キレた状況として現れていると考えることができる。

改訂された学習指導要領では「生きる力」を育ませることにより、子どもたちの心を豊かに育てようとしている。こういった状況からも子どもたち一人ひとりの「自尊感情」を大切に、どんな境遇にあっても、「自分は自分なんだ」という自己肯定の感情を抱き続けること、すなわち「自尊感情」を維持することが重要なこととなる。

ローゼンバーグ (Rosenberg, 1979) は、自尊感情の主要な決定因の一つとして反映的評価 (反映的自尊感情) を挙げている。反映的評価 (反映的自尊感情) とは、自己に対する他者の態度に深く影響され、時間が経過するにつれて人は他者によって見られるように自分自身を見るようになるというものである。Miyamoto & Dornbush (1956) は、その人自身による評価、他者が実際にその人について行っている評価、他者が自分について行っていると想像する評価との関係を検証している。その結果、自己評価と他者が自分について行っていると想像する評価との間の方が、自己評価と他者がその人に行っている評価との間の関係よりも強いことを明らかにしている。つまり、その人の自己評価は、実際に他者がどう評価してくれているかよりも、他者がこのように評価していると認知することの方が、その人の自己評価に大きな影響を及ぼしていることを見いだしている。

井上・龍門 (1994) は、学級場面における自尊感情の水準と安定性の役割の研究を行った。彼らは、自尊感情

*鳴門教育大学生活・健康系 (保健体育) 教育講座

**鳴門教育大学大学院生活・健康系 (保健体育) 教育コース

の構成要因を総合したものである自己評価(自尊感情)と、ある特定の社会的場面(文脈)での重要な他者からの評価の想像としての反動的評価(反動的自尊感情)を取り上げた。そして、ある特定の社会的場面で自尊感情と反動的自尊感情が一致していることは、自己の立場から見ても差異が少なく安定的であり、不一致は両者の立場から見ても差異が大きく不安定であると、自尊感情に安定及び不安定の次元を導入することの妥当性を確かめている。これによると、安定した高及び低自尊感情の間には一貫して有意差が認められたこと、高自尊感情であっても不安定な場合は、不安定な低自尊感情と結果が異なる場合があり、同じ高自尊感情であっても安定と不安定では、性質が異なること、及び低自尊感情であっても安定と不安定ではその性質が異なることを挙げ、自尊感情に安定・不安定の次元を導入することの必要性を指摘している。

一方、川畑(1996)はドナ・クロスの研究を引用し、自尊感情を育てるための教育プログラムの基本要素を示している。それによると、1) 自分の独自性に気づき、尊重させること、2) 自分の能力の長所と短所を客観的に評価させ、適切な目標を設定し、実現することによって自信を持たせること、3) 他者との結びつきや関係を感じさせ、他者から受け入れられているという感覚を持たせること、としている。

体育授業は、身体活動性・集団性・情緒性・課題解決性といった点で、自分の良さや可能性、自分自身の限界、自分の努力により味わうことのできる成就感や達成感、仲間との心身の触れ合い、かかわり合いから味わう喜びや葛藤など、様々な体験のできる素晴らしい時間である。こういった時間の中で児童一人ひとりが自分のもつよさや可能性を最大限に引き出し、友だちのよさや可能性をお互いに賞賛し合えることができれば、児童一人ひとりに健全な自尊感情が芽生えることが予想される。

ここで、体育授業と自尊感情に関する先行研究をいくつか取り上げてみる。岡(1998)は、体育学習における自己評価を自尊感情との関連から研究した。それによると、技能に関わりの深い「学習成果」についての自己認知が、本人の価値観や規範認知とは独立に self-esteem に強く関連していることを示唆しながらも、技能についての自己認知だけが繰り返されるならば、技能についての自己認知が低い児童は自尊感情を高めることができないと指摘している。また、賀川(2002)は大学生を対象とし、体育授業が学習者の自尊感情の形成にもたらす影響を検討した。その結果、体育授業において自尊感情の形成に寄与する要因としては、体力トレーニング等による運動処方を取り入れた先行研究の場合と異なり、単に運動能力に関わる自己評価だけではなく、活動目的や活動の意義など、活動者の価値観に関わる自己評価項目(創

造性、チームワークの発揮、活動性、競争性、応援・観戦)との関連が強いことを示唆した。

ジェームス(James, 1892)は、無数にある可能な自己の中から一つの自己を選択し、その選択された自己こそが自己評価や自尊感情の基準となることを指摘している。例えばある児童が学校生活の中で体育授業の時間を一番大切にし、その時間の自分の姿を自分自身に対する最も重要な自己評価の基準として考えていたとする。しかし、「体育の時間に求められる自分」と「ありたい自分」とが異なっていたり、「自分と体育そのものの可能性をさぐる」ことができない場合には、体育授業の中で健全な自尊感情を育むことはできないばかりか、自尊感情の低下につながってしまうであろう。こういった視点からも、体育授業を通して健全な自尊感情を育むためには、単に運動能力が優れているという観点だけではなく、体育学習を受けている子どもたち一人ひとりが何に価値を置いて授業を受けているのかという視点と、その自己評価との関連で捉えていく必要があるように思われる。

一方、子ども達の自尊感情に強く影響を与える領域(自己、仲間、親、学校)には個人差があるとも言われており、個人が自己のどのような領域を特に重要視しているのかが重要であると言える。よって本研究の仮説の一つとして、「体育」を他教科よりも重視している児童にとっては、その程度が高いほど、体育授業が児童の自尊感情形成に影響を与える可能性が高いと言える。

以上の先行研究に基づき、本研究では体育授業における自尊感情の形成にかかわる要因として体育授業における価値観・運動有能感を想定し、それらが自尊感情の高低並びに安定・不安定とどのような関係を持っているのか分析することを目的とした。なお、「体育授業における価値観」は体育学習における価値要因、「運動有能感」は、体育学習における特定能力の自己評価要因として設定した。

II. 研究方法

1. 調査内容

a. 自尊感情尺度

岡(1997)が作成したものを一部修正し、使用した。全部で9項目(表1参照)で、各項目の質問に対して「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階による評定を求めた。合計得点は9点～36点に分布する。

b. 反動的自尊感情尺度

自尊感情尺度と同様の尺度(表1参照)を使用し、担任教師からどのように評価されていると思うかを児童が想像して回答する。

c. 体育学習における価値観尺度(以下、価値観尺度

表1 自尊感情測定尺度

| 項 目 |
|--------------------------|
| 私は、自分に満足しています。 |
| 私は、自分をだめな人間だと思えます。 |
| 私は、自分には、よいところがあると思っています。 |
| 私は、物事がうまくできていると思えます。 |
| 私には、自まんでできるようなものはありません。 |
| 私は、自分が役に立っていないように感じます。 |
| 私は、自分を、価値のある人間だと思えます。 |
| 私は、失敗ばかりしているように思えます。 |
| 私は、自分が好きです。 |

とする。)

岡 (1997) が作成したものをを使用した。全部で28項目 (表2参照) で、各項目の質問に対して「とても大切だと思う」から「まったく大切だと思わない」までの4段階による評定を求めた。

d. 体育学習における達成感尺度 (以下、達成感尺度とする。)

意識化された自己の側面を児童がどう把握しているかという認知の内容であり、感情を含まないものとする。この調査項目は、児童の価値観の観点で自己を意識化させ、それぞれにおける現実自己の程度について評定を求めることによって、価値観の観点で認知された自己を把握するものである。体育学習における価値観尺度と同様の項目 (表2参照) を使用し、各項目の質問に対して「すごくできている」から「ぜんぜんできていない」までの4段階による評定を求めた。

e. 運動有能感尺度

岡澤 (1996) が作成したものをを使用した。全部で12項目 (表3参照) で、各項目の質問に対して「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階による評定を求めた。合計得点は12点~60点に分布する。

2. 調査対象

徳島県17小学校、香川県1小学校、高知県2小学校、静岡県6小学校、岡山県1小学校の総勢2,812名の小学校高学年児童を対象とし、2,549名の有効回答数を得た。なお、この調査における有効回答率は96.8%であった。

3. 調査方法

調査a~eについて、各小学校でクラス毎に学級担任による一斉調査を実施した。

4. データ処理

自尊感情尺度、反動的自尊感情尺度についてはその全体得点を、運動有能感尺度については、それらの下位尺

表2 体育学習における価値観測定尺度

| 項 目 |
|-----------------------------|
| 授業のきまりをきちんと守る。 |
| 資料や本を使って、運動のこつや練習方法を調べる。 |
| 友だちと競争をして勝つ。 |
| むずかしいことでも進んで練習する。 |
| 友だちと教え合ったり、ほじょし合ったりする。 |
| あるものになりきって、体の動きで表現する。 |
| 勝ち負けにこだわらず、楽しく運動する。 |
| 先生に言われたことを、きちんと守る。 |
| 練習する場所や用具を、工夫する。 |
| みんなよりじょうずにできたり、よい記録を出す。 |
| せいっぱい、全力をつくして運動する。 |
| 友だちの努力や進歩を認め、はげましてあげる。 |
| うまくできたときに、みんなの前でして見ってもらう。 |
| ゲームや競争で勝っても負けてもすなおにみとめる。 |
| 先生や友だちの話をきちんと聞く。 |
| 楽しいことに気づいたり、発見したりする。 |
| みんなができないような技やプレーをする。 |
| 学習に集中し、最後までやり通す。 |
| みんなでワイワイ楽しく運動する。 |
| 新しい動きや変わった動きをつくり出す。 |
| 失敗したり、競争に負けたりしても、くじけずにがんばる。 |
| 器具や用具を正しく使う。 |
| ゲームや競争をした後は、勝敗のげんいんを考える。 |
| 自分の最高記録を出す。 |
| 苦手なことでも、いっしょうけんめいする。 |
| だれとでもなかよくする。 |
| はずかしがらずにのびのびと動く。 |
| 自分の力や体調にあわせて運動する。 |

表3 運動有能感測定尺度

| 項 目 |
|--|
| 私は、運動能力がすぐれていると思えます。 |
| 私は、たいていの運動は、上手にできます。 |
| 私は、練習をすれば、必ず技術や記録はのびると思えます。 |
| 私は、努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思えます。 |
| 私が、運動をしているとき、先生がはげましたり、応援してくれます。 |
| 私が、運動をしているとき、友だちがはげましたり、応援してくれます。 |
| 私には、いっしょに運動をしようときそってくれる友だちがいます。 |
| 私は、運動の上手な見本として、よく選ばれます。 |
| 私には、いっしょに運動する友だちがいます。 |
| 私は、運動について自信をもっているほうです。 |
| 私は、少しむずかしい運動でも、努力すればできると思えます。 |
| 私は、できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思えます。 |

度毎の合計得点並びに運動有能感全体得点を算出した。また、価値観尺度については、主因子解・バリマックス回転による因子分析を行い、回転後の因子負荷量の絶対値 0.45 以上を基準として因子を解釈し、因子負荷の高い上位 4 項目により下位尺度を構成した。その結果、価値観尺度は 4 下位尺度で構成され、下位尺度合計得点をそれぞれの尺度得点とした (表 4 参照)。

表 4 体育学習における価値観の下位尺度名と項目

| 「努力・挑戦」 | | 負荷量 | |
|---------|-----|-----------------------------|--------|
| 第一下位尺度 | Q21 | 失敗したり、競争に負けたりしても、くじけずにがんばる。 | 0.6841 |
| | Q25 | 苦手なことでも、いっしょうけんめいする。 | 0.6764 |
| | Q04 | むずかしいことでも進んで練習する。 | 0.6043 |
| | Q11 | せいっぱい、全力をつくして運動する。 | 0.5778 |
| 「規律遵守」 | | 負荷量 | |
| 第二下位尺度 | Q08 | 先生に言われたことを、きちんと守る。 | 0.7654 |
| | Q01 | 授業のきまりをきちんと守る。 | 0.7494 |
| | Q15 | 先生や友だちの話をきちんと聞く。 | 0.7054 |
| | Q22 | 器具や用具を正しく使う。 | 0.5603 |
| 「思考・探求」 | | 負荷量 | |
| 第三下位尺度 | Q20 | 新しい動きや変わった動きをつくり出す。 | 0.724 |
| | Q06 | あるものになりきって、体の動きで表現する。 | 0.7183 |
| | Q13 | うまくできたときに、みんなの前でして見ってもらう。 | 0.5677 |
| | Q09 | 練習する場所や用具を、工夫する。 | 0.4627 |
| 「自己優越」 | | 負荷量 | |
| 第四下位尺度 | Q10 | みんなよりじょうずにできたり、よい記録を出す。 | 0.7502 |
| | Q03 | 友だちと競争をして勝つ。 | 0.7084 |
| | Q17 | みんなができないような技やプレーをする。 | 0.6772 |
| | Q24 | 自分の最高記録を出す。 | 0.6202 |
| 累積寄与率 | | 43.9(%) | |

達成感尺度は、価値観尺度と同様の下位尺度構造とした。また、児童が体育授業で価値を置いていることをどれくらい達成できているのかを把握するために((達成感下位尺度得点~価値観下位尺度得点) / 価値観下位尺度得点 × 100) という達成率を求めた。そして、この達成率を体育学習における効力感得点 (以下、効力感得点とする。) とした。次に、それらと自尊感情尺度得点との積率相関係数を求めた。さらに、自尊感情尺度得点を従属変数とし、価値観 4 下位尺度、達成感 4 下位尺度、運動有能感 3 下位尺度の得点及び全体得点を独立変数とした重回帰分析を行った。その際、変数の組み込み方法は増減法とし、採択基準は 5% 水準とした。最後に、自尊感

情、反映的自尊感情ともに平均点以上を高自尊感情児童、高反映的自尊感情児童、平均点より低い児童を低自尊感情児童、低反映的自尊感情児童とし、その組み合わせにより 4 群を設定した。これらの自尊感情水準と安定性を組み合わせた 4 群が価値観得点、達成感得点、運動有能感得点、効力感得点に及ぼす影響を調べるために一要因分散分析を行った。なお、安定性とは、高自尊感情と高反映的自尊感情、低自尊感情と低反映的自尊感情のように自尊感情尺度と反映的自尊感情尺度に対する児童の自己評価が一致している場合を「安定」とした。また、高自尊感情と低反映的自尊感情、低自尊感情と高反映的自尊感情のように児童の自己評価にズレが生じている場合を「不安定」とした。

III. 研究結果及び考察

1. 学年・性別による各下位尺度ごとの全体傾向

表 5 は、各下位尺度ごとに学年・男女別平均値を求めたものである。

表 5 尺度別平均得点の比較

| 調査項目 | 5年女子 | 6年女子 | 5年男子 | 6年男子 | 学年差 | 性差 | |
|---------|-----------|------|------|------|------|-----|-----|
| 自尊感情 | 27.2 | 26.6 | 27.8 | 27.5 | *** | *** | |
| 反映的自尊感情 | 27.2 | 26.9 | 27.4 | 27.5 | - | *** | |
| 価値観 | 努力・挑戦 | 13.9 | 13.7 | 14.0 | 13.9 | - | - |
| | 規律遵守 | 14.0 | 13.6 | 13.7 | 13.5 | *** | * |
| | 思考・探究 | 10.6 | 10.1 | 10.7 | 10.2 | *** | - |
| | 自己優越感 | 10.0 | 10.1 | 10.8 | 10.9 | - | *** |
| 達成感 | 価値観全体 | 48.5 | 47.5 | 49.1 | 48.5 | ** | ** |
| | 努力・挑戦 | 11.4 | 11.1 | 11.7 | 11.9 | - | *** |
| | 規律遵守 | 11.7 | 11.4 | 10.9 | 11.2 | - | *** |
| | 思考・探究 | 8.1 | 7.5 | 8.7 | 8.2 | *** | *** |
| 運動有能感 | 自己優越 | 9.0 | 8.8 | 10.1 | 10.2 | - | *** |
| | 達成感全体 | 40.1 | 38.8 | 41.4 | 41.4 | * | *** |
| | 身体的有能さの認知 | 8.7 | 8.1 | 9.9 | 9.7 | *** | *** |
| | 統制感 | 11.8 | 11.6 | 12.3 | 12.4 | - | *** |
| 運動有能感 | 受容感 | 12.5 | 12.5 | 11.6 | 11.6 | - | *** |
| | 運動有能感全体 | 33.1 | 32.2 | 33.8 | 33.6 | - | *** |

注) *** : p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

- : No Significant

自尊感情については、2 要因分散分析の結果から、5 年男 > 6 年男 > 5 年女 > 6 年女の順に有意に得点が高い。さらに、反映的自尊感情については、学年差はみられないものの、男子の方が女子よりも有意に得点が高い傾向にあり、自尊感情、反映的自尊感情ともに男子の方が女子よりも高い傾向にある。しかし、5 年男については、反映的自尊感情得点が自尊感情得点より低い傾向にあり、5 年生男子児童は全体的に不安定高自尊感情児童が多い

傾向にある。次に体育学習における価値観については、特に男女ともに、「努力・挑戦」尺度、「規律遵守」尺度の得点が高い傾向にあり、一生懸命練習したり、きまりをきちんと守ることを大切にしている。

全体的に女子に比べて男子は、一生懸命練習することにより技習得などを行い、体育授業の中で自己優越を感じており、運動に対しても自信を持っている。こういった結果は、賀川（1984）が小・中・高校生を対象に行った体育授業における楽しさに関する研究の中で、女子に比べて男子は「競争性」や「挑戦」という要因に体育授業の楽しさを求めるという結果につながるものであると言える。逆に女子は、体育授業の中で、きまりをきちんと守っていたり、先生や友だちからよく受容されていると感じている。

2. 自尊感情得点と調査尺度間の相関係数

図1は、自尊感情尺度と各調査尺度得点との相関を示すものである。これからも明らかなように、自尊感情得点と有意な相関係数を示す尺度としては、「反動的自尊感情」得点が最も高く、次いで「運動有能感」得点、運動有能感第1下位尺度の「身体的有能さの認知」得点、体育学習における達成感第4下位尺度の「自己優越」得点、体育学習における達成感第1下位尺度の「努力・挑戦」得点、運動有能感第2下位尺度「統制感」得点などであり、すべての調査尺度が自尊感情得点と有意な相関係数を示した。これらの結果から、小学校高学年児童の自尊感情に関わる要因としては、「反動的自尊感情」が自尊感情ともっとも強い関連があり、続いて「運動有能感」の関連が強いことが考えられる。賀川（2001）は、大学生を対象にした自尊感情向上に関わる要因には、身体的有能感よりも一般的効力感や体育授業における楽しさ要因との関連が強いという結果を示した。本研究では、体育授業における楽しさという概念を測定していないため一概には言えないが、小学校高学年児童と大学生では、自尊感情向上に影響を与える価値的要因が多少異なっている可能性がある。つまり、小学校高学年児童では、体育授業の中で自分が「うまくできる」とか、友だちよりも優れている、運動に自信を持つことが自尊感情の向上につながっていると考えられる。

3. 自尊感情を従属変数とした重回帰分析

次にこれらの各項目が自尊感情得点に及ぼす影響力を明らかにするため、自尊感情得点を従属変数とし、その他の尺度項目得点を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果を示したものが表6である。

これからも明らかなように、ステップワイズ法による重回帰分析により自尊感情得点を推定する尺度得点としては、7下位尺度が採択された。この7下位尺度得点と

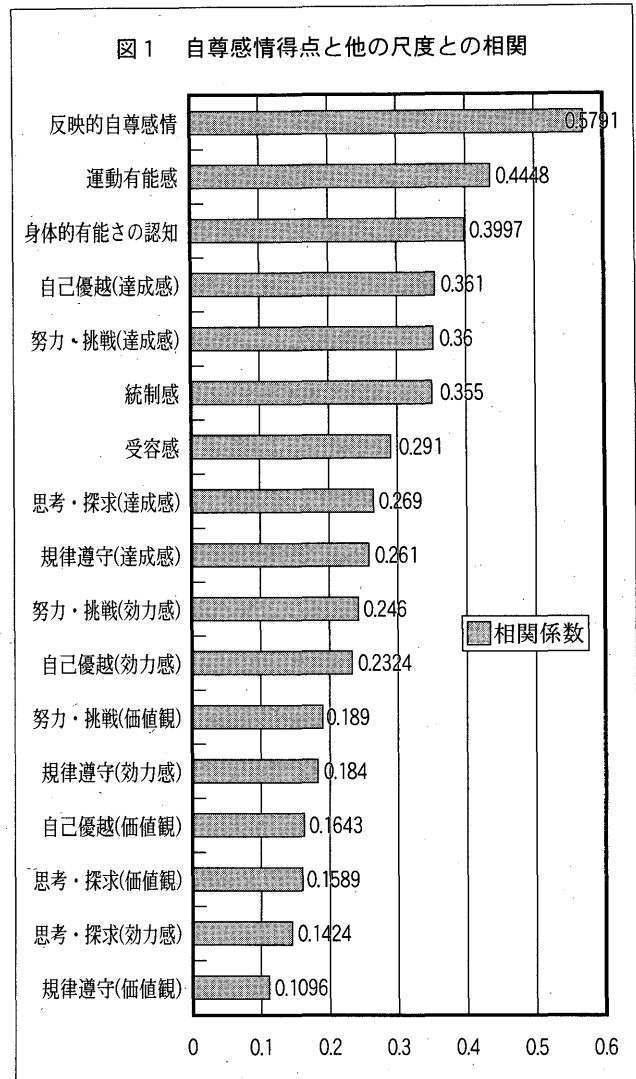


表6 重回帰分析結果

| | 標準偏回帰係数 | 有意水準 |
|-------------------------|---------|------|
| 運動有能感 | 0.3200 | *** |
| 規律遵守(達成感) | 0.1610 | *** |
| 努力・挑戦(達成感) | 0.0929 | *** |
| 統制感 | -0.0800 | * |
| 身体的有能さの認知 | 0.0756 | * |
| 規律遵守(価値観) | -0.0642 | ** |
| 自己優越(達成感) | 0.0573 | * |
| 重相関係数 = 0.48 説明度 = 0.23 | | |

注) *** : p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

自尊感情得点との重相関係数は0.48であり、その説明力は23%と低い値であった。そして、運動有能感得点の標準偏回帰係数は0.3200、体育学習における達成感第2下位尺度の「規律遵守」得点の標準偏回帰係数は0.1610、続いて体育学習における達成感第1下位尺度の「努力・挑戦」得点は0.0929、運動有能感第1下位尺度の「身体的有能さの認知」得点は0.0756、体育学習における達成

感第4下位尺度の「自己優越」得点は0.0573と、いずれも正の値を示した。一方、運動有能感第2下位尺度の「統制感」得点は-0.0800、体育学習における価値観第2下位尺度の「規律遵守」得点は-0.0642と、負の標準偏回帰係数を示した。

このように、小学校高学年児童の自尊感情の高低に対して、運動有能感得点と体育学習における達成感第2下位尺度の「規律遵守」得点が特に強い規定力をもっていることが示された。これらのことから、小学校高学年児童の自尊感情を体育授業を通して育む方略の一つとして、児童に運動有能感をもたせること、先生に言われたことをきちんと守ること、授業のきまりをきちんと守ることができているなどの規律遵守に関する自己認知を促進することが効果的であると思われる。

しかし、運動有能感得点、体育学習における達成感第2下位尺度の「規律遵守」得点、体育学習における達成感第1下位尺度の「努力・挑戦」得点、運動有能感第1下位尺度の「身体的有能さの認知」得点、体育学習における達成感第4下位尺度の「自己優越」得点は、それらの得点が上がれば上がるほど自尊感情得点を高める可能性を示しているのに対し、運動有能感第2下位尺度の「統制感」得点、体育学習における価値観第2下位尺度の「規律遵守」得点が上がると、自尊感情の向上に負の影響を及ぼすことが考えられる。なお、体育学習における達成感第2下位尺度の「規律遵守」得点が正の標準回帰係数を示すのに対して、体育学習における価値観第2下位尺度の「規律遵守」得点が正の標準回帰係数を示す理由については、現実と理想との不一致による不協和を反映したものと考えられる。

4. 自尊感情水準と安定性の組み合わせが下位尺度得点に及ぼす効果

自尊感情水準と安定性の組み合わせが体育学習における価値観下位尺度、達成感下位尺度、効力感下位尺度並びに運動有能感下位尺度の獲得点に及ぼす効果を検討するために、下位尺度ごとに、自尊感情の高低と安定・不安定の組み合わせによる1要因分散分析を行い、多重比較を行った。なお、多重比較の有意水準は5%水準とした。

(1) 自尊感情水準と安定性の組み合わせが体育学習における価値観に及ぼす影響 (表7参照)

「努力・挑戦」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と安定低自尊感情との間に差が認められた。「規律遵守」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安

表7 自尊感情水準と安定性の組み合わせによる価値観下位尺度得点

| 下位尺度 | 高自尊感情 | | 低自尊感情 | |
|-------|-------|------|-------|------|
| | 安定 | 不安定 | 安定 | 不安定 |
| 努力・挑戦 | 14.4 | 13.9 | 13.5 | 13.7 |
| 規律遵守 | 14.1 | 13.5 | 13.4 | 13.7 |
| 思考・探究 | 11.0 | 10.3 | 10.1 | 10.4 |
| 自己優越 | 10.9 | 10.8 | 10.2 | 10.2 |

尊感情と安定低自尊感情の間に差が認められた。「思考・探究」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定低自尊感情と安定低自尊感情の間に差が認められた。また、「自己優越」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。これらの結果から、体育学習における価値観4下位尺度において、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の水準間に一貫して有意な差が認められた。

(2) 自尊感情水準と安定性の組み合わせが体育学習における達成感に及ぼす影響 (表8参照)

表8 自尊感情水準と安定性の組み合わせによる達成感下位尺度得点

| 下位尺度 | 高自尊感情 | | 低自尊感情 | |
|-------|-------|------|-------|------|
| | 安定 | 不安定 | 安定 | 不安定 |
| 努力・挑戦 | 12.6 | 12.0 | 10.8 | 11.0 |
| 規律遵守 | 12.1 | 11.5 | 10.8 | 11.2 |
| 思考・探究 | 8.8 | 8.4 | 7.6 | 7.8 |
| 自己優越 | 10.6 | 10.1 | 8.8 | 9.1 |

「努力・挑戦」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「規律遵守」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定低自尊感情と安定低自尊感情の間に差が認められた。「思考・探究」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安

定低自尊感情の間に差が認められた。これらの結果から、体育学習における達成感4下位尺度について、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定低自尊感情と安定低自尊感情の水準間に一貫して有意な差が認められた。

(3) 自尊感情水準と安定性の組み合わせが体育学習における効力感に及ぼす影響 (表9参照)

表9 自尊感情水準と安定性の組み合わせによる効力感下位尺度得点

| 下位尺度 | 高自尊感情 | | 低自尊感情 | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 安定 | 不安定 | 安定 | 不安定 |
| 努力・挑戦 | -12.2 | -12.9 | -19.3 | -19.1 |
| 規律遵守 | -14.0 | -14.0 | -18.9 | -17.8 |
| 思考・探究 | -19.1 | -17.8 | -22.6 | -22.9 |
| 自己優越 | 0.7 | -4.8 | -11.7 | -8.4 |

「努力・挑戦」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「規律遵守」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「思考・探究」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「規律遵守」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。これらの結果から、体育学習における効力感4下位尺度において、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間、不安定高自尊感情と安定低自尊感情の水準間に一貫して有意な差が認められた。なお、体育学習における効力感は、(達成感下位尺度得点-価値観下位尺度得点)1価値観下位尺度得点×100)という達成率を求めており、達成感から価値観を引いているために、安定高自尊感情児童の「自己優越」尺度以外がマイナスとなっている。これは、児童の体育学習における達成感下位尺度得点よりも体育学習における価値観下位尺度得点の方が高いためである。

(4) 自尊感情水準と安定性の組み合わせが運動有能感に及ぼす影響 (表10参照)

「身体的有能さの認知」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情

表10 自尊感情水準と安定性の組み合わせによる運動有能感下位尺度得点

| 下位尺度 | 高自尊感情 | | 低自尊感情 | |
|-----------|-------|------|-------|------|
| | 安定 | 不安定 | 安定 | 不安定 |
| 身体的有能さの認知 | 10.5 | 9.8 | 8.2 | 8.4 |
| 統制感 | 13.3 | 12.6 | 11.6 | 12.3 |
| 受容感 | 13.0 | 12.3 | 11.5 | 11.6 |

の間に差が認められた。「統制感」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「受容感」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。「運動有能感全体」では群間に0.1%水準で有意差が認められ、多重比較の結果、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間に差が認められた。これらの結果から、運動有能感3下位尺度において、安定高自尊感情と不安定高自尊感情、不安定低自尊感情、安定低自尊感情との間、不安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の水準間に一貫して有意な差が認められた。

(5) 自尊感情水準と安定性の組み合わせが下位尺度得点に及ぼす効果の全体的傾向

以上の結果より、価値観下位尺度得点、達成感下位尺度得点、効力感下位尺度得点、運動有能感下位尺度得点ともに傾向に多少の違いはあるものの、安定高自尊感情>不安定高自尊感情>不安定低自尊感情>安定低自尊感情の順で得点が高く、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間には一貫して0.1%水準で有意差が認められている。井上・龍門(1994)の研究では、安定高自尊感情と安定低自尊感情の間の一貫した有意差がみられたが、本研究では安定高自尊感情と不安定低自尊感情の間にも一貫した有意差がみられた。これらのことから、不安定高自尊感情・安定低自尊感情児童は、担任教師が不安定高自尊感情・安定低自尊感情児童のよさや可能性を見いだし、児童が大切にしている価値観に関する事柄や児童のよさを積極的に評価することで不安定高自尊感情は安定高自尊感情児童へ、安定低自尊感情児童は不安定自尊感情児童へと移行する可能性を示している。また、不安定低自尊感情児童は、有意差は認められないものの、体育学習における価値観第2下位尺度の「規律遵守」得点、体育学習における価値観第3下位尺

度の「思考・探究」得点において、不安定高自尊感情児童よりも不安定低自尊感情児童の方が高い傾向にある。これらの傾向を教師が認め、励ましたり、評価したりすることによって、児童が体育授業の中での「規律遵守」や「思考・探究」の大切さをより感じ、自分自身に自信を持つことができれば、安定・高自尊感情児童へと移行する可能性を示唆している。

IV. まとめと今後の課題

本研究は、体育授業が小学校高学年児童の自尊感情形成に及ぼす影響を検討するために、小学校高学年児童の体育授業における各種要因と自尊感情との関連を分析した。

自尊感情の規定要因としては、「体育学習における特定能力に関わる自己評価要因」、「体育学習の価値にかかわる自己評価要因」を想定し、それぞれ「運動有能感」、「体育学習における価値観」「体育学習における達成感」「体育学習における効力感」をそれらの測定尺度項目とした。

そして、自尊感情とこれらの測定項目との相関係数を求めた結果、反映的自尊感情得点、運動有能感得点、身体的有能さの認知得点、体育学習における第4下位尺度の「自己優越」得点、体育学習における達成感第1下位尺度達成感の「努力・挑戦」得点、「統制感」得点の順に高い有意な相関係数が示された。また、自尊感情得点を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、「運動有能感全体」得点、体育学習における達成感第2下位尺度の「規律遵守」得点、体育学習における達成感第4下位尺度「自己優越」得点、体育学習における達成感第1下位尺度「努力・挑戦」得点、身体的有能さの認知得点、体育学習における価値観第2下位尺度の「規律遵守」得点、「統制感」得点が有意な独立変数として採択され、その7変数と自尊感情得点との重相関係数は0.48であった。また、自尊感情水準と安定性の組み合わせが及ぼす効果においては、価値観得点、達成感得点、運動有能感得点、効力感得点ともに傾向に多少の違いはあるものの、安定高自尊感情>不安定高自尊感情>不安定低自尊感情>安定低自尊感情の順で得点が高く、安定高自尊感情と不安定低自尊感情、安定低自尊感情の間には一貫して0.1%水準で有意差が認められている。

これらの結果により、体育授業において自尊感情の形成に寄与する要因としては、児童に「運動有能感」をもたせることが重要であることが示唆された。また、それと同時に「規律遵守」も自尊感情形成に寄与する要因として規定力を持っていることが示唆されている。これらのことから、運動にあまり自信のない児童に対しては、運動有能感を感得させることだけに重点を置くのではな

く、規律遵守ができていない児童に対して、教師が積極的に評価することにより、児童の自尊感情に良い影響を与えることが期待できる。さらに、教師の積極的な働きかけにより児童の反映的自尊感情に変化をもたらすことができるならば、安定低自尊感情児童は、不安定低自尊感情児童という性質の異なる低自尊感情児童へと改善させることが期待できると思われる。

今後、これらの視点から各変数に対する介入を試みることにより、より実証的な研究を進める必要がある。

V. 文 献

- 井上祥治・龍門慎治, 学級場面における自尊感情の水準と安定性の役割, 岡山大学教育学部研究収録, 第99号, pp.47-52, 1995.
- 榎本博明, 自己に対する評価的認知と感情, 「自己」の心理学—自分探しへの誘い—, pp.29-33, 161-201, 1998.
- 榎本博明・稲本和子・松田信樹・梅垣 武, 自尊感情に関する概念的検討, 大阪大学教育学年報, 第6報, pp.141-149, 2001.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治, Self-Esteemの研究, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 18, 2, pp.53-65, 1974.
- 岡 雅洋, 体育学習における自己評価に関する研究—セルフ・エスティームとの関連からの検討—, 鳴門教育大学修士論文, 1997.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎, 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, 16, No.2, pp.145-155, 1996.
- 賀川昌明, 体育授業の心理学, 大修館書店, pp.92-97, 2002.
- 賀川昌明, 大学生の自尊感情と一般的効力感, 運動有能感, 体育授業における態度および成績評価との関連, 鳴門教育大学紀要, pp.24-25, 2002.
- 賀川昌明, 体育授業における楽しさの要因分析(2)—その因子構造の検討—, 徳島大学教養部紀要(保健体育), 第15巻, pp.1-17, 1982.
- 梶田叡一, 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 58-65, 1980.
- 川畑徹朗, セルフ・エスティームを育てる, 初等教育資料, No.547, pp.68-71, 1996.
- 小西 淳・松尾祐作, Self-Esteemと適応に関する一研究—大学生を対象として—, 福岡教育大学紀要, 第46号, 第4分冊, pp.243-251, 1997.
- Fox, K. R., Self-esteem, Self-perceptions and Exercise., Int. J. Sport Psychol., 31, pp.228-240, 2000.
- Miyamoto, S. F. & Dornbush, S., A test of the symbolic

- interactionist hypothesis of self-conception., American Journal of Sociology, 61, pp.399-403, 1956.
- Rosenberg, M., Society and the Adolescent Self-Image., Princeton, NJ: Princeton University, 1965.
- Rosenberg, M., Conceiving the self., Basic Books, 1979.
- 山崎 賢・千原孝司, 「生きる力」と self-esteem, 滋賀大
学教育学部紀要, 教育科学 No.49, pp.49-63, 1999.
- Waschull, S. B. & Kernis, M. H., Level and stability of self-esteem as predictors of children's intrinsic motivation and reason for anger., Personality and Social Psychology Bulletin, 22, pp.4-13, 1996.

Relationship between Self-esteem of Higher Grade Children in Primary School and Values, Motor Competence in Physical Education Class

Masaaki KAGAWA* , Naoki YOKOTA**

A purpose of this study was to analyze the relationship between Self-esteem of higher grade children in primary school and Values, Motor Competence in physical education class. In order to achieve this purpose, four kinds of questionnaires were administered to the 2549 higher grade children in primary school. The questionnaires were composed of following scales; Self-esteem, Reflective Self-esteem, Values in physical education, Sense of attainment in physical education and Motor competence. The scale of Values and the scale of Motor competence were divided into four sub-scales, respectively. The name of these sub-scales were as follows; Effort and Challenge, Observance of rules, Consideration and Investigation, Self-superiority (the foregoing were in Values scale), Cognition of physical competence, Sense of control, Sense of acceptance (the foregoing were in Motor Competence scale).

As a result of correlation analysis, the significant correlation coefficients between the self-esteem scale and the other scales were indicated ($p < 0.05$). And from a result of multiple regression analysis with stepwise method, the following seven scales were selected ($p < 0.05$). The name of these scales were Motor competence, Observance of rules (a sub-scale in the Sense of attainment), Effort and Challenge (a sub-scale in the Sense of attainment), Sense of control, Cognition of physical competence, Observance of rules (a sub-scale in the Values) and Self-superiority (a sub-scale in the Sense of attainment). In these scales, Motor competence and Observance of rules (a sub-scale in the Sense of attainment) had higher standard partial regression coefficient. As the results of ANOVA by four groups (stable high self-esteem, stable low self-esteem, unstable high self-esteem, unstable low self-esteem), the mean scores of all sub-scales in Values, Sense of attainment, Sense of efficacy and Motor competence were significantly different ($p < 0.001$). And in the almost sub-scales, the order of mean scores were as follows; stable high self-esteem > unstable high self-esteem > unstable low self-esteem > stable low self-esteem.

From these results, it was suggested that the following points were important for teachers in physical education class. The first point was to make children to feel motor competence, and the second point was to praise children for their rule observance behaviors. And through these attentions of teachers, the self-recognition of unstable low self-esteem children could be improved.

* Naruto University of Education, Department of Health and Living Science (Health and Physical Education)

** Naruto University of Education, Graduate Student of Health and Living Science (Health and Physical Education) Course.